

『ころ』の問いかけ

Junko Higasa 2014.10.14

乃木大将は敬愛する陛下の願いによって、心の中に罪悪感を抱いたまま生き続け、自刃を 35 年先に延ばした。先生は愛する奥さんを守るために、心の中に罪悪感を抱いたまま生き続け、死の決意を 20 余年先に延ばした。肉体的苦痛を感じる死の短い時間と、精神的苦痛に苛まれて生きなければならなかった長い時間と、どちらが苦しかっただろうか。漱石は、まずそれを問いかける。

そして、その問いかけを發した「先生の遺書」より後に書かれた「先生と私」で、「先生」は「私」に以下のように聞く。

「... 君、私は君の目にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」「中位に見えます」と私は答えた。この答は先生に取って少し案外らしかった。

これは、人間の心に強さ・弱さの確たる区別はないことを意味する。すなわち中位の人でも状況によって強くなったり弱くなったりするものだ。またそうできるのだ。そして誰もががある環境や立場において本来の意思に反する罪を背負う可能性があり、また同時に誰もが「愛」に動かされるものではないだろうか。それが漱石の更なる問いかけだ。

時代、個性、年齢によって違う内なる心の感性。その本人の真摯を、まだ死というものを知らない外ほかの誰が批判し、嗤うことができようか。